

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方～

I. 研究の内容

1. 研究の具体的な内容と方法

生活科教育研究部会では、県のテーマを受けて、その基となる「気づき」を中心とした「評価」に視点を当てて研究を進めていくことを確認した。そして、サブテーマ「生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方」を設定し、研究を重ねてきた。昨年度は、国立教育政策研究所が示している「評価規準作成のための参考資料」を用いて、具体的な評価規準のたて方やその見取り方についての研究・実践を行い、評価方法等の工夫の改善のための参考資料となる「東山版 新評価規準を生かす授業づくり」と題した冊子の作成を行った。

生活科も平成4年の新設以来、二度の学習指導要領の改訂を経て「セカンドステージ」とも呼ばれる新たな展開の時を迎えている。教育には、「不易と流行」という言葉がたびたび用いられるが、時代の変化に合わせて新たに創造される要素と、教科の本質として大切に守り伝えていく要素の適切なバランスが不可欠である。一方、生活科における評価は、学校教育法第30条によって新たに定義された「学力の三要素」にも対応しており、「生きる力」の育成を目指すこれからの教育にあっては、生活科三観点による評価が重要視されている。

そこで、今年度は昨年度の成果を基に、教科としての「生活科」の特性や存在価値を再認識するため、「学習指導要領解説」を基にした「理論研究」と、教師の主体的・体験的研修を通しての「実践研究」を二本柱とする研究・研修へのアプローチを試みた。サブテーマ「生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価の在り方」に沿って、具体的な評価規準のたて方やその見取り方についての研究・実践を進め、設定された評価規準が授業の中でどのように扱われているかについても検証することとした。そして、年度末にはこれらの「理論研究」と「実践研究」の成果を冊子にまとめ、授業実践の中での活用を目指した。

体験や活動を通して学ぶ生活科において、教科の特性に応じた知識や技能を身につけさせるためには「育てたい力」を明確にしておくことが不可欠である。そして、そのねらいに基づいて子どもたちが表現した「主体的な学び」をどのように評価していくか、また育てたい力が確かに身に付いているかをきちんと見取る手段や方法を共有することで、生き生きと学ぶ生活科が実践できると考える。

2. 研究授業

(1) 第1学年「ともだちいっぱい おもいでいっぱい」

(授業者 東雲小学校 小幡香織教諭)

本単元は、1年間の思い出やできるようになったことをもとに「1年生思い出かるた」

を作り、それらを発表し合う活動を通して、自分の成長に気付くことをねらいとしている。

本時では、完成させた「1年生思い出かるた」をクイズ形式で発表し、答えを当てたり感想を交流したりする中で、発表することの楽しさに気付くことをねらいとした。一人一人が、自分の思い出やできるようになったことをかるたに表すという新しい表現活動を取り入れた研究授業であった。かるたを使うことで、子どもたちが、思いを共有している様子が伝わってきた。また、かるたをクイズ形式で発表することによって、子どもたちも興味関心をもって授業に参加していた。更には、かるたを発表して互いの思い出や感想を伝え合うことで、「ぼくもそう思ったよ。」「運動会で優勝できてよかったね。」などと、友だちとの交流も生まれていた。子どもたちが、生き生きと学習できるような手立てが工夫され、評価についても学びを深めることができた実践であった。

3. 臨地研修

北杜市小淵沢町の「えほん村」にて臨地研修を行った。生活科の作品作りには欠かせない表現の多様化を目指し、仕掛けカード作りという体験的な内容を中心とした研修であった。“通常の研究会ではできないことができる”ということが大きな経験であり、貴重な体験となった。

II. 成果と課題

【成果】

- 「教師のスキルアップ講習会」を通して、疑問に思っていたことや授業の工夫などを互いに出し合うことで、改めて学び合うことができた。
- 実践例や授業で取り組んでみて良かったことなどを情報交換することができ、今後の参考にすることができた。また、「学習指導要領解説」を基にした「理論研究」と、教師の主体的・体験的研修を通しての「実践研究」の内容をまとめた「Q&A」の冊子作りは、日々実践に向き合う教師にとって、すぐに授業に生かせるものになった。
- 昨年度の評価の冊子作りを基に、本年度はまた一歩踏み込んだ内容となった。実践に生かせるものがたくさん出てきて学びとなった。
- 夏季学習会は体験を中心とした内容で、日頃の研修ではできないことを学習することができ、貴重な体験となった。
- 生活科の教科の特性や内容について、「自然・人・自分・評価」の4つのテーマで、学習指導要領に戻って理論研究することができたことは、大きな成果だった。
- 指導・助言者の嶋崎教頭先生には、学習指導要領の解説について具体的な実践内容や学習活動に照らし合わせて説明していただき、大変勉強になった。

【課題】

- 授業研究の時期が決まっているので、授業研究の内容がかたよりがちで難しい。授業で学ぶことは多いが、昨年度も今年も冊子作りに取り組むなど、授業に代わる研究をしていることも大きい。こうした研究を広めていくことも良いのではないかな。
- 評価のあり方の一環として、どうやって評価をすべきかなどの学習も深めていきたい。

(部長 高野育愛)